

Gikyohan Times

No.0015

岐阜県教販通信

2021年9月発行

スクールイーライブラリー読書感想文コンクール

当社は岐阜県の全小中高校に教科書を供給し続けて100年以上の会社です。当社は岐阜県の全小中学校に「スクールイーライブラリー」進呈させて頂きました。電子図書によって新しい読書の機会を与えることで深い学びにつながる一助となれればと思います。9月15日よりスクールイーライブラリーの読書感想文コンクールを開催します。（添付チラシ参照）詳細情報は当社HP (<http://www.gifukenkyohan.co.jp>) のバナーでご確認もできます。岐阜県教販通信のバックナンバーもHPに記載しておりますのでご覧いただくと幸いです。



寺脇 研 氏

寺脇研(てらわき けん、1952年～)元文部官僚。星槎大学大学院教育学研究科客員教授。官僚時代には文部省 NO.1 の論客でなし、ゆとり教育の広報を担った。福岡県福岡市出身

岐阜県教販株式会社主催の読書感想文コンクールが、新たに始まるという。岐阜県教育委員会の後援も受けた、本格的な催しだ。わたしも、審査担当をさせていただくことになっている。

子どもたちが本に親しむための感想文コンクールは、多ければ多いほどいい。確実に、子どもが本を読む機会が増えるし、読んで感じたこと、考えたことを文章に書く作業によって、本の内容から得たものをしっかりと自分の中に定着させていくだろう。

ただ、コンクールが現場の先生方の仕事を過度に増やすことのないよう、配慮が必要だ。公的な性格が強かったり規模が大きかったりするコンクールでは、児童・生徒全員参加の形になるなど、指導や応募業務に当たる先生方のご苦労も大きい。子どもたちにとっても、全員参加となると負担感が出てくるのではないだろうか。

むしろ、今回のような中小規模のコンクールがしょっちゅう開催され、希望する児童・生徒が学校単位でなく個人の意思で参加する機会となっていくのも必要だろう。また、そうなるコンクールの性格も多様化していい。平和に関する本、未来に目を向ける本、歴史を学ぶ本など、ジャンルを特定したり、友だちに読んでほしい本、大切な人にプレゼントしたい本といった形にしたり、さまざまなものがあれば、子どもたちの意欲も一層強く湧いてくるかもしれない。

本は、人間の学びの基本となる教材だと思う。図書館も書店も学びの場だ。もちろん学校の図書室も。今から62年前、福岡市の小学校に入ったわたしは、図書室に並んだ大量の本に目を奪われた。1959年の日本では、家に本棚のあることさえ珍しかったのである。親から買ってもらった本が何冊かはあったが、それを棚に並べるほどの冊数ではなかった。いや、そもそも本棚を置くような子ども部屋もない。

わたしの学校生活の一番の楽しみは、土曜日の図書室通いだった。あの頃、土曜は午前中授業で給食はなく、放課後は家に帰って昼ご飯を食べる。その前に図書室に寄って、本を借りることができたのである。本を選ぶときのワクワクした気分を、今でも思い出す。今考えてみると、そんなに広い部屋でもなく、書棚の数もそんなになかったのだろうが、一年坊主からすると全てが大きく見えたのだろう。

選んだ本をランドセルに入れて帰宅し、昼ご飯もそこそこに、表紙を開いて読み始める瞬間のときめきも忘れられない。イソップ、グリム、アンデルセンの童話から、当時の人気作家・江戸川乱歩が子ども向けに書いた「怪人二十面相」「少年探偵団」シリーズまで、読みたい本は限りなく広がった。世界各国の童話を集めた「ラング世界童話集」全12巻を読破して、いろんな国のいろんな人がいて、いろんな物語のあることに夢を感じたのは二年生のときだったか。

そして最も印象深いのは、三年生で読んだ「クオレ」である。19世紀イタリアの作家アミーチスの小説で、自分と同じ小学三年生の子どもたちが主人公だ。身近に起きるさまざまな出来事を通して、友情、優しさ、思いやり、親子の情愛といった明るい面だけでなく、いじめ、妬み、差別など暗い部分も描かれていく。わたしにとっては、道徳の授業よりも自分の人格形成に影響を与えたと思っている。

子どもが本を読むことの意味は、それほど大きい。